ポール・リクール『時間と物語』の虚構論としての可能性と限界

萩原康一郎

はじめに

文学的フィクションが描き出す世界は、読者の現実世界といかなる積極的な関係ももたないのだろうか。もし何らかの関係を取り結んでいるとして、それではフィクションの言説は、日常言語や科学の記述言語、歴史記述といった現実を指し示すとされるタイプの言説と比べて、どのように異なるかたちで現実世界と関係を取り結んでいるのだろうか。

フィクションが現実世界と取り結ぶ関係については、「実在と虚構」、「真理と仮象」といった問題とともに、これまでにも多くのことが語られてきた。こうした研究を、ここでは虚構論と呼ぶことにしよう。

今日の虚構論は、より言語的な問題に即して論じられている。すなわち、虚構もしくは虚構的とされることばの意味作用と指示作用の問題に即して論じられている。[1] 実在しない人物や事がらに対する指示を含む、語、文、テクストの論理的な意味をどのように解釈すればよいのか。この点に関しては、フレーゲ以後の分析哲学、サールらの言語行為論、あるいはそれらに触発された英米系の論者が長きにわたって論争を続けてきた。

ところで、以上の問いを追究するにあたっては、単にことばと事物との関連づけの問題のみならず、想像力との関連、物語としての「構成」の役割、「作品」の存在性格、情動的効果、制作と受容からなるコミュニケーションの様態など、フィクションを成立させるさまざまな要素に目を向ける必要がある。

ここで注目されるのが、フランスの哲学者、ポール・リクール（一九一三―二〇〇五年）が展開する物語論である。リクールはその著書『時間と物語』（一九八三―八五年）において、小説や叙事詩に代表される「フィクション」と伝記や自伝を含めた「歴史」

とを包括する上位概念として「物語」を規定し、物語における意味と指示の問題について考察している。[2] もとよりリクールは哲学的関心から、この研究に取り組んでいるのだが、彼の展開する物語論は、フィクションを成立させるさまざまな要素をあますところなく考慮した、すぐれた虚構論としての性格ももっている。ところが、これまで日本におけるリクール研究[3]において、その虚構論としての側面が主題的に取り上げられることはほとんどなかった。この点に鑑み、『時間と物語』を、文学理論の立場から検討し、その虚構論としての側面を見ることで、フィクションが現実世界と取り結ぶ関係について考察するのが本稿の目的である。とくに本稿では、過去の現実世界のことを指し示すとされる歴史の言説と、虚構の世界を指し示すとされるフィクションの言説とをリクールがどのように区分しているのかという点に焦点をあてて論じたい。まずリクールがどのような経緯で、物語の意味と指示の問題を取り上げるにいたったかを見る。そのうえで、『時間と物語』において提示されるミメーシス論および「歴史とフィクションの交叉」という概念を検討し、その意義と問題点を指摘して、リクール物語論の虚構論としての可能性と限界を明らかにしたい。

1　隠喩的指示作用

リクールは、一九七〇年代から八〇年代にかけて、言語による意味創造の問題に取り組んでいる。この時期に書かれたのが、隠喩を扱った『生きた隠喩』（一九七五年）であり、また、物語を扱った『時間と物語』である。

『生きた隠喩』においてリクールは、隠喩を単なる文彩の一種としてではなく、精神の創造能力のあらわれとして捉える。隠喩とは、字義通りにとれば異なる意味をもった語と語のあいだに、前概念的なしかたで同一性を把握するという精神の創造能力のあらわれである（MV. 262-272; 254-277）。とすれば、生きた隠喩によってもたらされるのは、単なる修辞上の装飾的効果ではない。むしろ隠喩によってもたらされるのは、世界をあらたに「……として見る voir comme」ことの可能性である。すなわち、隠喩の示す革新的・創造的な意味が、ことばの内在的次元を超えて、言語外の事物へとふりむけられるとき、事物や世界についてのわれわれのヴィジョンは再記述され、変形され、活性化されうる。

このように隠喩において顕著なかたちで立ち現れてくる独特の指示（référence）の働きをリクールは「隠喩的指示作用 référence métaphorique」と呼ぶ（MV. 273-310; 285-324）。これは、詩的言語に特有の指示の様態であり、単に既成の現実を記述することにとどまる日常言語や科学的言語にはない指示作用である。

この指示作用は詩的テクストのレベルにおいてあらわれる。[4] 詩的

テクストにおいて、ことばは現実世界を直接的に指示するのではなく、間接的に指示する。ここで間接的に指示されるのは、世界の可能的・普遍的な相である。

ここにいたって隠喩は、あらゆる詩的テクストに偏在する原理とみなされる。生きた隠喩は、すでになじみぶかくなっているがゆえに隠れている事物の様相や、日常の目的連関のなかで生きるわれわれには不透明となっている経験の内実を、見えるようにしてくれる発見的装置である。そればかりではない。生きた隠喩は、理解するという仕方で存在する現存在の可能性をあらたな局面へと開く言語の創造性の原理でもある。とすれば「隠喩にもっともふさわしく、究極的な場」は、「〈あるêtre〉という繋辞」である。隠喩的「……である」とは、字義通りの「……である」と字義通りの「……でない」とを同時に含みこむ、「……のようであるêtre comme」である（MV. 310-321; 325-344）。

『生きた隠喩』で述べられた隠喩論をもとにして、リクールは物語論を展開していくわけだが、このさい作業仮説としてリクールは、隠喩的な言表からなる詩のことばと、叙事詩や小説に代表される物語のことばとを並行関係において捉える（TRI. 122; 143）。前者が意味論的革新力や隠喩的指示作用を、感覚的・パトス的な領域において働かせるのに対し、後者はそれらを人間の行動（プラクシス）の領域において働かせるというのである。

ところで、そもそも『生きた隠喩』において中心的に扱われていたのは日常的経験の場における詩的なことばのふるまいである。そのかぎりでは、フレーゲから借りた「指示Bedeutung」の用語も有効に働いた[5]。しかし、物語にこの語を適用することには、困難が生じてくる。この点についてリクールは『時間と物語』のなかで次のように述べている。

> 読解の媒介にこのように訴えることは、拙著『生きた隠喩』と現在の研究とのもっとも目につく違いを示す。この前著で私は、指示という用語を保存できると信じていた。たしかに詩的作業による再記述が、日常的経験のまっただ中でおこなわれるかぎりでは、この用語を用いることもできよう。それだけではない。私は、詩そのものに生を変える力を認めた。そのために私は、隠喩的言表の特徴である「……として見る」と、隠喩的言表の存在論的相関物である「……のようである」とのあいだに、一種の短絡を起こし、それを利用した。〔中略〕しかしながら、テクスト世界という考えを緻密に反省すればするほど、またその世界が、内在における超越という身分規定をもっているという特徴を正確に描き出そうとすればするほど、私は確信するにいたった。統合形象化から再形象化へと移行するには、テクストの虚構の世界と読者の現実の世界という二つの世界の対決が要求されるのである。これ

により、読解という現象は、再形象化に欠かせない媒介者となったわけである。（TRIII. 230-231; 290-291）

ここでリクールは物語を扱うにあたって、「指示」という用語に代わって、読解という媒介を経る「再形象化」という概念を持ち出す必要がある、と述べている。なるほど「指示」という用語が、ことばに先立って実在する事物を「指し示す」という意味に解される以上、この用語をもって物語と事物や世界とのかかわりを解明することはむずかしい。そもそもフィクションに代表される物語は、いかなる実在物ともかかわりをもたないと一般に了解されているからである。また、歴史に代表される物語においても、過ぎ去った昔の事がらが歴史記述に先行して実在するという素朴な考えは、もはや自明ではなくなっているからである。こうした事情をふまえて、リクールは「再形象化」という概念が必要となる、と述べるわけだが、それにしても「再形象化」とはいったいどのような概念なのだろうか。また、リクールは、「テクストの虚構の世界と読者の現実の世界という二つの世界の対決」が要求されるという。これは具体的にどのような対決なのだろうか。そもそもリクールはテクストの虚構世界と読者の現実世界とをどのように規定し、また、両者の関係をどのように捉えているのだろうか。以下、この問題を中心に『時間と物語』を見ていこう。

2 リクールのミメーシス論

自己理解の問題を自らの解釈学的探究の中心に据えるリクールにとって、物語とはまず何よりも人間の行為や出来事の複雑な関係を理解へともたらす言語行為である。物理学的な因果関係では汲みつくせない多様で複雑な人間の行為や出来事の関係は、物語に仕上げられることで理解可能となる。このような着想を具体化するためにリクールは、アリストテレスが『詩学』で述べたミメーシス論を独自に解釈し、これを悲劇のみならず物語と呼ばれうるものすべてに適用できる概念とする（TRI. 55-84; 57-97）。

そのうえでリクールは、ミメーシスを制作から受容へといたる動的な過程として描き出す。リクールはミメーシスを三つの局面に分け、これを循環構造におく（TRI. 85-129; 99-156）。第一の局面は、先形象化（préfiguration）と呼ばれる。これはテクストとして言語化されるに先立ってあらかじめ直観によって形成されている、現実の行動や出来事についての理解の図式にかかわる。第二の局面は、統合形象化（configuration）と呼ばれる。これは、詩的制作の過程である。統合形象化とは、先形象化における理解の図式を素材として、これを語り手の視点から統合し、言語へともたらして、テクストとして形象化する過程である。ここで「始め・中・終り」をそなえた筋（intrigue）によって、個々の行為や出来事に因果的連

関が与えられ、ストーリーが作り出される。第三の局面は、テクストを一つのまとまりをもったストーリーとして受容し、これを「作品」として実現する読みの働きにかかわり、この過程が再形象化（refiguration）と呼ばれる。

この再形象化という概念は、現代の受容美学や読書行為論の考えにもとづいた概念である。テクストが何らかの意味を内在化し、そこで独自の世界を繰り広げているのだとしても、その意味が理解され、テクストが実現するためには、筋をたどるという読みの行為を待たなければならない。ただし読者は、単に筋をたどり、意味を理解するだけにとどまらない。読むということは、テクストの「意味から指示へとむかう動きを追っていく」ことであり、テクストの意味が指し示す「世界の地平」を了解することである（TRI. 119; 139）。読者は、テクストが示す世界に身を投じることで、テクストを経過する以前に抱いていた現実についての理解を変容させ、世界の見方を拡大する可能性を引き受ける（TRI. 121; 142）。

現実の行為や出来事についての理解の図式を素材として物語テクストが形成され、読解行為のうちで物語テクストはふたたび現実の生きた経験の領野へと立ち返る。これこそリクールが自らの解釈学的探究の基底に据える、物語テクストと読解行為との弁証法的構造にほかならない。この構造は、『時間と物語』という著作全体の旋律核であり、基本構図である（TRI. 85; 100）。この基本構図をもとに、リクールは物語を通じての自己理解という主題を掘り下げていくことになるのだが、その過程で「指示」という用語もまた検討されることになる。ミメーシス論という基本構図においてはいまだ「指示」という用語が保持されており、「現実世界を隠喩的に指し示す」という考えが保持されているが、同時に読解という現象が重要視されはじめている。この読解というあらたな視点は、歴史とフィクションのそれぞれが現実世界と取り結ぶ関係の類比性を扱う議論のなかで、さらに詳細に検討されていくこととなる。

3　歴史とフィクションの交叉

リクールは、まず歴史とフィクションの共通点を確認する。歴史もフィクションも、統合形象化という共通の構成化原理に従っている、と考えるのである。[6] そのうえでリクールは、歴史とフィクションとがそれぞれに現実世界と取り結ぶ関係について検討する。ここで指示作用の問題が検討され、「歴史とフィクションの交叉」という概念が提示される（TRIII. 265; 334）。この概念によってリクールは、歴史とフィクションは、実在と虚構として全面的に対立していない、それどころか、互いに指示作用の原理を借用しあう相補的な関係（complémentarité）にある、と主張する。これはいかなる関係であろうか。

まず、歴史の側から見てみよう。なるほど歴史は過去に実在した世界を志向する点で、非実在の世界を志向するフィクションとまずは異なる。しかし、歴史が志向する過去の世界とは、もはや過ぎ去って、今では消滅した世界でもある。この「かつてあった」という肯定性と「もはやない」という否定性とを同時にはらむ過去の逆説的性格をどのように捉えたらいいのか。

コリングウッドの「追体験 reenactment」[7]のように、物語られた歴史がそのまま過去と「同一」であるとする主張は斥けなければならない。歴史家が過去の歴史世界を「追体験」しようといくら意図したところで、当の歴史家もまた歴史世界を生きている以上、歴史家の思考が「他なるものとしての過去」と同一化することは不可能である（TRIII. 206-212; 256-261）。他方で、フランスの宗教史学者セルトーのように、過去の否定的存在論（ontologie négative du passé）を唱えてみても、過去を正当に捉えることにはならない。現在の地平と過去の地平との異質性や差異を強調し、「歴史のエクリチュールや歴史説明がもちいる抽象概念の外部にこそ過去は現われるのだ」として過去の他者性をいくら強調してみても[8]、現在にまで存続している過去の既在性、「かつてあったこと」を積極的に捉えたことにはならない（TRIII. 212-218; 261-267）。このように過去が「同 le Même」にも「異 l'Autre」にも回収されないとき、リクールは「類比 l'Analogue」に訴える（TRIII. 149; 183）。この場合「類比」とは、歴史記述がオリジナルな過去と「類似」している、ということを意味するわけではない。「類比」とは、関係と関係の類似を意味し、とくにこの場合は、歴史において物語られる出来事と「実際の」過去の出来事とのアナロジカルな関係を示している。また、「類比」とは、「……である」という「同」の契機と「……でない」という「異」の契機を自らのうちに含む、「……のようである／……としてある être-comme」の契機でもある（TRIII. 225-226; 273）。要するに、「〔歴史〕物語と〔過去の〕出来事の流れのあいだには、複写、反復、等価の関係はなく、隠喩的な関係がある」（TRIII. 223; 271）。

リクールは、歴史記述と過去の出来事とのこの隠喩的な関係を「代理表出」（représentance）と呼ぶ（TRIII. 204-5; 254-5）[9]。「実在した過去」をいくら忠実に再構成しようとしても、全知全能の神でもないかぎり、過去を「ありのままに」再現する（représenter）ことはできない。というより、オリジナルな過去など存在しない以上、再現という事態がそもそも成り立たない。過去の出来事は「実際に起きたかのように」というかたちでしか語れない。したがって、何より排除されなければならないのは、「歴史家の言語は、事実そのものをして語らしめるように完全に透明になりうる」という偏見である。過去の出来事は、「物語で語られるように起こったにちがいない」というかたちでしか記述できない。そもそも歴史が、史料、古文書、化石、遺物、記念碑といった「痕跡 la trace」に意味を付

与し、それをもとに構成された人為の所産である以上、その制作にはいずれにせよ想像力が介入している。この点で歴史は文学的筋立ての方法を模倣せざるをえない（TRIII. 224-226; 271-274）。

この「代理表出」による過去の表出作用は、制作の問題としてのみならず、受容の問題としても捉えられなければならない。歴史のテクストをたどりつつ、読者はすでに失われた過去世界を想い描く（se figurer: TRIII. 268-9; 338）。過去の世界はありのままに再現されるのではなく、読解行為のうちで「……として見る voir-comme」というかたちで想い描かれる。歴史家によって「あたかも……のように comme si」というかたちで物語られ、読者によって「……として comme」というかたちで想い描かれる点において、歴史はフィクションの力を借用しており、そのかぎりで歴史は「フィクション化」されている（TRIII. 274-5; 345-6）。

次にフィクションの側を見てみよう。一般に、フィクションが描く人物や出来事などは「非実在的」であると了解されている。こうした常識的な考えをリクールは乗り越えていく（TRIII. 228; 287）。そもそもフィクションの言表とは、現実の作者の声ではなく、虚構の語り手の声である。したがって、フィクションにおいては、現実の発話状況を離れて、テクスト内部に独自の「テクスト世界」が展開されることになる（TRII. 150-225; 187-290; TRIII. 149; 184）[10]。このテクスト世界にあって虚構の語り手や作中人物は、人間の行動（プラクシス）の潜在的性質を自由に展開する。ここで人間の経験のあらたな可能性が開示され、変形される（TRIII. 229; 288）。

このフィクションの開示・変形の作用は、読解理論と結びつけられる。リクールはイーザー、ヤウスらの理論を詳細に検討し、作品が「テクストと読者の間の相互作用から生じる」ことを確認する（TRIII. 245; 303）[11]。自律性を保ちつつ複数の解釈に向けて開かれているテクストと、テクスト世界を実現させる読解行為とのあいだには、問いと答えの弁証法が働く。それは、ガダマーのいう「地平の融合」や「適用」にも比すべき事態である（TRIII. 243-263; 301-320）。この事態についてリクールは、「自己化 appropriation（横領、自分のものにすること）」という概念によって描き出してもいる（TRIII. 230; 289）[12]。「自己化」とは、日常の目的連関を離れた「遊戯」の場としてのテクスト世界にいったん自己を放棄して参入し、テクストが提示する可能的な世界において想像的に変容し拡大した自己をうけとるという、一連の動きを示す概念である。ことばがそれに先行して存在する何らかの世界を指し示したり、隠喩的に記述しなおしたりするのではなく、読むことにおいてテクスト世界が実現され、さらにはその世界が読者の現実世界へと投影されるのだ、というこの読解理論において、もはや「指示」の概念には重要性がなくなってくる。

リクールによれば、フィクションもまた歴史を模倣する。何事で

あれ物語るということは、「実際に起きたかのように」物語ることである。じじつ多くのフィクションは過去時制で語られる。なるほどヴァインリヒがいうように[13]、フィクションにおける動詞の過去時制や「むかしむかしあるところに」は、読者に向けてメッセージが虚構であることを告げ知らせるシグナルにすぎないと解することもできる。しかし、リクールはこうした考えを「非生産的」であるとして斥ける（TRII. 100-113; 117-132）。リクールによれば、フィクションは準過去（quasi-passé）、すなわち「虚構の過去のようなもの」と関係する。それは誰にとっての過去か。それは虚構の物語る声（voix narrative）にとっての過去だ、とリクールはいう。フィクションを読むということは、「物語において語られる出来事は、物語る声の過去に属するのだ」という読解協定を受けいれることである（TRIII. 276; 348）。フィクションの描き出す虚構の出来事は、それが物語る声にとっての過去の現実であるというかぎりで「歴史化」されており、再形象化のなかで「かつて実際に起きたこと」として想い描かれる。この「フィクションの歴史化」という事態において、フィクションには「歴史的過去の実現されなかったある種の可能性をあとからふりかえって解放する」という機能が生じてくる。自由な想像力を行使できるフィクションは、非実在的だが実際にあったかもしれないことを物語ることで、「実際の過去のなかで埋もれている可能性の探知機」となる（TRIII. 278; 350）[14]。

以上のような意味で、歴史とフィクションとは交叉しているといわれる。テクスト世界は、ことばによって「指示」されるのではなく、読解のなかで「想い描かれる」ことによって実現する。そこで開示された人間経験のあらたな可能性が、読者の住まう「今、ここ」の現実に投影される。このとき歴史の語る史的真実とフィクションの語る詩的真実とは、再形象化において重なり合い交叉する（refiguration croisée）。こうしたリクールの主張は、『生きた隠喩』の問題点を十分に克服している。それだけではない。フィクションについての制作理論、読解理論を歴史の側にも適用し、さらには歴史の側からもフィクションを規定するリクールの物語論は、実在と虚構という単純な二分法を乗り越えているという意味で、虚構論の研究史に、一つの展開をしるしづけてもいる。

そもそも従来の分析哲学や言語行為論では、ことばの配列やその論理的身分が問題となっていた。そこで前提とされていたのは、ことばはそれに先行して実在する事物を指し示すための道具であり、また、実在物との直接的な対応関係が見込まれるときにはじめて真理値を獲得するという考えである。こうした前提のもとでは、フィクションは端的に偽か（ラッセル[15]）、あるいは、真偽にかかわらない「見せかけ」のことば（ストローソン[16]）、正しい主張の「ふりをする」ことば（サール[17]）として、否定的にしか捉えられなくなる。これに対してリクールは、「読者」という独特の存在者を主題化することで、

フィクションが現実世界と取り結ぶ関係を、ことばの配列やその論理的身分の問題としてではなく、われわれの想像力や生きた経験、感受能力（アイステーシス）の問題として取り扱う。フィクションの読解において、読者は、悟性的認識という態度ではなく、いわば享受という態度でテクストに臨む。すなわち読者は、テクストの記述を感覚可能な実在物と照合し、その真偽性を問うという仕方ではなく、テクストの空白部分を想像的に補完し、いわば「追創造」するという仕方で、テクストに臨む。さらに読者は読解の果てに、「実際の過去のなかに埋もれている可能性」を発掘し、これまで以上に自己自身や自己が取り巻かれている現実の歴史世界に対する洞察を深め、実存の領野を拡大しうる。このように読解の契機を重視するリクールの理論は、フィクションの虚構世界と読者の現実世界との関係を積極的に捉える可能性を示している。

4　世界制作の虚構性

ここでただちに想起されるのは、ネルソン・グッドマン（一九〇六―一九九八年）の「世界制作（world making）」の概念であろう。[18] グッドマンは唯一実在する世界という考えを誤謬として斥け、世界はそれを記述する、ある「ヴァージョン（version）」（語り方・記法）にしたがって言明されることによって、そのつど制作（make）されると考えた。世界とは、あらゆる正しい「ヴァージョン」によって記述されるところのものであり、世界を語る正しい「ヴァージョン」は複数存在するから、それに応じて世界も複数的となる。

グッドマンは、哲学や科学と、文芸・美術・音楽などの芸術とを、「ヴァージョン」であることにおいて区別しない。その探求や構築の仕方において、両者に根本的な違いはない。したがって、虚構は非現実の世界に対してではなく、科学と同じく現実世界にこそ適用される。そのさい、芸術は直接的な指示ではなく、隠喩的な真理によって指示を行う。発見・創造・理解などの知識拡張において、文学的フィクション作品や芸術の他の分野でこれに相当する作品は、世界制作にめざましい役割を果たしており、芸術には科学と同等、あるいはそれ以上の重要性が認められる。ここで重要なのは、「ヴァージョン」がつねに人為的・文化的な所産である以上、世界が真なる「ヴァージョン」によって制作されるということは、現実が虚構によって制作されるということを意味している点である。グッドマンの思想は、虚構と非虚構、芸術と科学という区別を廃し、それらの根源に共通に虚構が存在することを核心とする。

もとより、解釈学を背景とするリクールの思想と、分析哲学を背景とするグッドマンの思想とは、相当に異なる。前者が過去の地平と現在の地平との隔たりとその取り戻しを主題化するのに対し、後者は科学の真理性を主題化する。また、前者がテクストと読者との

相互作用を強調するのに対し、後者は概念相対主義に立って世界の複数性を強調する。このように両者の思想には食い違っている面も多い。しかしながら、少なくともここまでに見てきた「歴史とフィクションの交叉」という概念と、「世界制作」の概念は、現実世界が虚構の制作にもとづいて認識されると考える点において、さらには現実世界の存在根拠に虚構を認めるという点において、著しく近しい位置にあるといってよい。「交叉」の概念が示しているのは、過去の現実世界がテクストの読解のうちで制作され、理解され、認識されるということであり、そうである以上、歴史世界は根源的には虚構を地盤として成り立っているということを認めることにほかならないからだ。

このようにリクールの思想とグッドマンの思想との共通点を示してみると、しかしながら、あらためて次のような問いが浮上してくる。すなわち、はたしてわれわれは何によって、また、何のために、歴史とフィクションとを区分しているのか、という問いである。

少なくともここまでに見てきた「交叉」の議論は、この問いに対していかなる解答も用意していないように思える。「指示」から「再形象化」へと力点を移動させ、さらには、歴史をもフィクションについての読解理論に包摂するというリクールの理論は、歴史とフィクションの区分を事実上、解消してしまっているからである。

しかし、「交叉」という以上、そこには歴史とフィクションとを分かつ何らかの基準が働いているはずである。歴史とフィクションとの区分が維持されているからこそ、「交叉」という事態が生じるといえるからである。はたしてリクールは歴史とフィクションとを何によって、また、どのように区分しているのだろうか。以下、リクールに即してこの問いを検討し、そこで生じる困難を指摘して、リクール物語論の虚構論としての限界を描き出してみよう。

5 「負債」概念の実効性

リクールにおいて、歴史はあくまで過去に「実在」した事物を志向するのであり、その点で歴史を物語ることはフィクションに依拠しつつも、自らの自律性を維持している。リクールによれば、この自律性は、歴史家が死者、とりわけ忘れられた犠牲者に対して負う「負債 dette」にもとづいている（TRIII, 148; 183）。歴史家は、過去に犯された過ちを後世に忠実に語り伝えるという責務を負っている。だからこそ歴史家は、新しい史料が出現するたびに、過去の歴史をたえず修正し、再構成して、よりいっそう出来事に忠実な歴史を書くように仕向けられる。つまり、歴史の物語は死者への「負債」によって規制されており、この点で歴史はフィクションから分かたれるというのが、リクールの立場である。

ところで、この事態は、通常の読書の場面でも妥当するだろうか。

リクールの立論に沿えば、歴史の物語り手におとらず、歴史の読者にもまた、死者に対する負債が課せられていることになる。リクールにとって、歴史を読むことは、過去の現実をそのつど忠実に再構成し、記憶することで、過去の人間から借りたものを返済する行為である。しかし、すでに大塚良貴氏が指摘しているように、歴史の読者が、つねに負債意識を十全に働かせるとはいいがたい。「そのつどの読解行為が本当に『負債』の返済になるのかどうか、その保証はどこにもない」[19]からである。なるほど、歴史の読解において、証言や痕跡や史料の拘束が意識されることもないわけではないだろう。しかし、歴史を物語る行為に比べれば、その拘束力ははるかに弱い。じっさい歴史の記述は徹頭徹尾、虚構のこととして読まれうる。素朴な感覚からいっても、読者の側に、歴史を過去に実在した出来事として読むのか、虚構の出来事として読むのかについての絶対的な規範は共有されていそうもない。

なるほど、死者の声を書き、記録し、後世に伝えようとすることは人間の歴史性の一つの条件といえるのかもしれない。しかし、歴史は死者に対する負債とはかかわりなく書かれうるし、またそれ以上に、読まれうる。そうである以上、負債という概念に、歴史をフィクションから分かつ基準となるだけの強度が備わっているとはいいがたい。

読解のなかでテクスト世界が実現されるという考えをとった時点で、歴史とフィクションとの区分はいかなる基準をもってしても客観的には保証されなくなっているといってよい。にもかかわらず、事実問題としてわれわれが歴史とフィクションとを区分しているのだとすれば、その区分は何によって保証されていると考えればよいのだろうか。やはりこの区分は、テクストのある種の書かれ方、表紙やタイトルといったテクスト外の指標、文化的に公認されたジャンルの拘束など、読者共同体によって暗黙のうちにコード化された諸々の規約によってしか保証されないと考えるべきであろう。このさい重要なのは、こうした規約が、制度的・慣習的な取り決めにすぎない、ということである。テクストが現実の世界を示す「歴史」なのか非現実の世界を示す「フィクション」なのかは、約定的なかたちでしか保証されておらず、読者に相対的である。要するに、テクストの示す世界が現実なのか非現実なのかは、われわれがそうみなすかぎりにおいてはじめて決定されているのであり、「歴史」とか「フィクション」とかいった実体が読者に先行して存在しているわけではない。様式やジャンルに関する取り決めが、テクストの指示につねに優先しているのである。[20]

このように歴史とフィクションとの区分が、約定的なかたちでしか保証されておらず、また、読者のそのつどの態度決定に依存するところが大きいのだとすれば、リクールのいう負債とは、歴史をフィクションから分かつ客観的基準というよりもむしろ、倫理的要

請と考えられるべきである。歴史を読むことを通じて、死者がかつて生きた現実を忠実に想い描き、これを記憶すること、それは歴史を読むことの倫理であって、決してそれ以上でもそれ以下でもない。読者がこの要請につねにいつでも応じるわけではないことを考えれば、これは歴史を読むことにつきまとう一つの倫理上の課題というべきであろう。この点は、歴史の物語論の文脈で今後も議論されるべき課題ではあろうが、今はこれ以上、立ち入ることは控えよう。むしろわれわれの関心は、フィクションの側にある。

いかにしてフィクションは自らの自律性を維持しているのだろうか。リクールによれば、「フィクションは、史料による立証という外的拘束から自由である」が、「物語る声の準過去は小説創作に、内的拘束を及ぼして」おり、そのため「小説家」には、虚構の世界を「完璧に『表現する』という厳しい掟」が課されることになる。この「創造の掟 la loi de la création」は、歴史家に課される負債に似ている、とリクールはいう（TRIII. 278-9; 351）。小説家は、史料による立証という拘束を受けておらず、それゆえテクスト世界を自由に展開させることができるのであるが、これを「過去の可能性の探知機」として機能させるために、虚構世界を「実際にあったかのように」完璧に表現しなければならない、というわけである。

このようにフィクションを創造することは小説家に課される「創造の掟」によって規制されており、この点でフィクションは歴史に依拠しつつも自らの自律性を維持しているというのが、リクールの立場である。

この見解に対しては、歴史の読解に見たのと同じような批判が可能である。リクールの立論からいえば、フィクションの場合にあっても、作者の側だけでなく読者の側にも何らかの拘束が働かなければならないことになる。すなわち、フィクションで繰り広げられる出来事をそのつど歴史のなかに埋もれてしまった実存の可能性の開示として読み取り、これを現実に適切に投影するという読解コードが読者を十分に規制しているときのみ、フィクションは「過去の可能性の探知機」として十全に機能する。しかし、読者の側に、虚構世界をいかなるかたちで実現させるかについての規範が共有されているとはまず考えにくい。そもそもからして読者がフィクションに描き出された行為や出来事をつねに非現実のこととみなすとはかぎらない。また、たとえそのようにみなしたとしても、これを現実の生の領域にそのつど適切に適用するともかぎらない。美的享受の域にとどまって、テクスト世界を内的に完結したものと見なし、これをいかなる現実とも関連づけまいとする読者がいる一方で、テクストに書かれた内容を過剰に現実にふりむけてしまう読者もいるのだとすれば、読者が虚構世界をいかなるかたちで実現するかは、歴史の場合と同様、原理的にはそのつど任意である。

いずれにせよ、フィクションは過去に起りえたことを記述する、

それゆえ、実存の可能性を自由に開示・変形する場となる、そのとき、フィクションは読者にとっても「過去の可能性の探知機」となる、という考えをもってフィクションを規定するリクールの理論では、虚構世界と読者の現実世界とが接合する地点で生じるさまざまな問題をうまく説明できなくなる。そもそもからして、ことばが不透明な対象である以上、読者が、統合形象化から再形象化へとつねに適切なかたちで移行するとはかぎらない。作者、テクスト、読者のよどみなき交流を想定しているかぎりで、リクールの理論はあまりに調和主義的であるといわざるをえない。論者の見るところ、ここでリクール物語論は虚構論としての限界に突き当たるように思われる。

おわりに

ことばはそれに先行して実在する事物を指し示すための道具であり、また、実在物との直接的な対応関係が見込まれるときにはじめて真理値を獲得するという考えに拘泥するかぎり、フィクションは否定的にしか捉えられなくなる。たとえ実在物との直接的な対応関係をもたないにしても、フィクションが人間社会で現に有意味なものとして機能しており、ともかく何らかのかたちで読者の現実世界と関係を取り結んでいると了解されている以上、その独特の存在性格を積極的に捉える理論が求められる。この点で、リクールの「指示」から「再形象化」への移行は意義深い。虚構世界は読者のうちで想い描かれることで実現する。読者は、そこで得られた実存のあらたな可能性や、よりいっそう拡大した世界観をもってふたたび現実世界を見つめなおす。こうしたリクールの考えは、フィクションの虚構世界と読者の現実世界とが取り結ぶ関係を積極的に捉える可能性を示している。

なるほど、フィクションは読み手に発見的効果をもたらす。フィクションは、乱雑な情報に満ちた現実世界をある意味で単純化し人為的に整序した仕方で提示するがゆえに、現実を直接に認識することだけにとどまっていては決して得られない意味をもたらしてくれる。ときにフィクションは、日常の目的連関のなかを生きているだけでは盲目的になりがちなわれわれに、今、ここに生きることの意味を告げ知らせてくれもする。

しかし、このようなフィクションについての制作理論および読解理論が歴史の領域にまで拡大適用され、さらには歴史の側からもフィクションが規定されるならば、歴史とフィクションを分かつことは事実上、不可能となる。虚構の制作原理、読解原理に基づいているという点で両者に区別はなく、したがって、テクストに描かれた内容を現実のこととみなすか、非現実のことみなすかは、究極的には読者に相対的である。こうした考えを暗に認めつつ、リクール

は負債という概念を持ち出し、あくまで歴史とフィクションとの区分を維持しようとする。両者の区分を解消することに躊躇し、根本的なところで倫理的な概念を持ち出してこざるをえなかった点に、リクールの鋭い倫理観、人間観を見て取ることができるとともに、虚構論としてのある種の不徹底さもまた見て取ることができる。

このように限界を見てとったうえで、あらためて問われるべきなのは、はたして死者への「負債」が、歴史的存在でもある現存在の存在様態にとってどれほど根源的か、ということであろう。また、そこから翻って、歴史の「負債」にも似た「創造の掟」が、フィクションの作り手と受け手をどれほど根源的に規制しているのか、ということであろう。それを明らかにすることで、フィクションという世界理解の形態が現にそのようなかたちで存することの意味が明らかになるかもしれない。さしあたって、リクール物語論から逆照射した言語論を探ることはひとつの方法であろう。しかし、そのためにも、リクールの語る負債の意味を十分に展開して、その豊かな意味を汲みつくさなければならないだろう。今後の課題としたい。

文献と略号

リクールの著作からの引用は、以下のように略記し、〔原文の頁: 翻訳の頁〕として本文中に挿入した。なお、引用に際しては、適宜、訳語、訳文をあらためた。

MV : *La métaphore vive*, Seuil. 1975.（久米博訳『生きた隠喩』、岩波書店、一九八四年）。

TRI : *Temps et récit, I, L'intrigue et le récit historique*, Seuil. 1983.（久米博訳『時間と物語Ⅰ』、新曜社、一九八七年）。

TRII : *Temps et récit, II, La configuration dans le récit de fiction*, Seuil. 1984.（久米博訳『時間と物語Ⅱ』、新曜社、一九八八年）。

TRIII : *Temps et récit, III, Le temps raconté*, Seuil. 1985.（久米博訳『時間と物語Ⅲ』、新曜社、一九九〇年）。

SA : *Soi-meme comme un autre*, Seuil. 1990.（久米博訳『他者のような自己自身』、法政大学出版局、一九九六年）。

註

（1） Bertrand Russel,《On Denoting》, in *Mind* vol. 14, Oxford University Press, 1905.〔清水義夫訳「指示について」、『現代哲学基本論文集Ⅰ』（勁草書房、一九八六年）所収〕. Peter Frederick Strawson,《On Referring》, in *Mind*, vol. 59, Oxford University Press, 1950.〔藤村龍雄訳「指示について」、『現代哲学基本論文集Ⅱ』（勁草書房、一九八七年）所収〕. John R. Searle, *Speech acts : an essay in the philosophy of language*, Cambridge University Press, 1969.〔坂本百大・土屋俊訳『言語行為：言語哲学への試論』、勁草書房、一九八六年〕. P. Lamarque and S. H. Olsen, *Truth, fiction, and literature: a philosophical perspective*, Clarendon Press, Oxford University Press, 1994. Lorenzo Bonoli,《Fiction et connaissance》, in *Poetique*, 124, Seuil, 2000.

（2） リクールは「フィクション」ないし「フィクション物語（récit de fiction）」という語を、文学的物語を指し示すのに用いる。『時間と物語』においてこの語は、リクールが「物語の二大様式」とみなすものの一方を指し示し、もう一方の歴史物語（historiographie）ないし歴史記述（récit historique）と対立的に用いられる。リクールのいう「フィクション」は、「文学ジャンル理論が民話、叙事詩、悲劇、喜劇、小説といった項目でもって配置するすべて」（TRII. 11: 3）を指し示す。本稿で論者は、この使用法に準じて「フィクション」という語を用いる。

（3）久米博『象徴の解釈学』、新曜社、一九七八年。杉村靖彦『ポール・リクールの思想』、創文社、一九九八年。北村清彦『藝術解釈学』、北海道大学図書刊行会、二〇〇三年。大塚良貴「物語ることと読むこと」、『思想』、岩波書店、二〇〇三年第十号所収。

（4）『生きた隠喩』において「テクスト」という語は、話されているものと書かれているものとを問わず、「ディスクールの複合した実体」を意味し、また、「作品としてのディスクールの産出」を意味している（MV. 277; 291）。リクールのいう「作品」とは、個々のディスクールが相互に意味連関をなして織りなされた構成体のことを意味し、次の三つの特徴を有している。第一に、「作品」においてディスクールは、単なる文の総和に還元できない総体として「構成」されている。第二に、その構成はすでに文化によって公認された「ジャンル」のコードに従属している。第三に、各々の作品は独自の「文体」を備えており、他の何ものにも変えがたい個的存在である（*ibid.*）。『生きた隠喩』における「テクスト」概念は、「産出」、「構成」という動的な意味合いよりもむしろ、「構成体」という静的な意味合いが強調されているといえよう。そこでは、テクストとテクスト外との関係に考察が絞られており、作者や読者という要因は十分に考慮されていない。

（5）Cf. Gottlob Frege:《Über Sinn und Bedeutung》, *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 1892.〔土屋俊訳「意義と意味について」、『現代哲学基本論文集Ⅰ』（勁草書房、一九八六年）所収〕. Sinn と Bedeutung は、現代の分析哲学において、意味（meaning）と、指示（reference）ないし表示（denotation）と呼ばれているものと、それぞれほぼ同義とみなされる。フレーゲの Sinn は「意義」、Bedeutung は「意味」と訳されることが多いが、本論では混乱をふせぐため、Sinn を「意味」、Bedeutung を「指示」と訳した。

（6）一方で、リクールは、科学となるために物語性を脱しようとする歴史学の傾向には与せず、歴史もまた物語ることによって、人間の歴史的条件を記述すると述べる。人間の経験の歴史性は、本質的に物語を通じてしか言語化されない、というのである。他方で、リクールは、フィクションを脱時間化し、深層構造を抽出しようとする物語記号論の方法にも与せず、筋をたどることの時間性を重視する。歴史とフィクション、いずれの様式も、統合形象化をその制作原理としている。（TRI. 134; 160; TRII. 12; 4）

（7）Cf. Robin G. Collingwood. *The Idea of History*, Clarendon Press; Oxford University Press, 1965.〔小松茂夫・三浦修訳『歴史の観念』、紀伊國屋書店、一九七〇年〕

（8）Cf. Michel de Certeau, *L'écriture de l'histoire*, Paris, Gallimard, 1975.〔佐藤和生訳『歴史のエクリチュール』、法政大学出版局、一九九六年〕

（9）ドイツ語では「代理 Vertretung」と「表象 Vorstellung」との区別が存するが、フランス語では「代理 représentation」と「表象 représentation」の違いが曖昧になってしまう。これを受けて、リクールは、représentation という語を用いることを避ける。代わりにリクールは、lieutenance, représentance という語を用い、これらに「代理」、「代理表出」という意味を割り当てる（TRIII. 204; 254）。ここでリクールは、それ自体として把握不可能な過去の出来事は「痕跡」の意味作用を媒介として現在のうちに表出される、という事態を強調しようとしている。

（10）ジュネットが定式化したように、いかなるフィクションにおいても発話行為の主体は虚構の語り手であり、現実の作者ではない（Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972.〔花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』、書肆風の薔薇、一九八五年、《discours du récit》の部分の邦訳〕）。したがって、虚構の語り手によって語られる人物や出来事、あるいはそれらの諸関係から生まれる作品内世界は、現実の人物・出来事・世界とは直接かかわりないものとして展開されるし、またそのようなものとして読者に理解される。たとえ、作品に「一九四五年、アジア太平洋戦争が終わった」などという歴史的出来事を指示することばが書かれていたとしても事態は原則的に変わらない。

（11）Cf. Hans Robert Jauss, *Literaturgeschichte als Provokation*, Frankfurt, Suhrkamp, 1974.〔轡田収訳『挑発としての文学史』、岩波書店、二〇〇一年〕. Wolfgang Iser, *Der Akt des Lebens, Theorie*

Ästhetischer Wirkung, München, Wilhelm Fink, 1976.〔轡田収訳『行為としての読書』、岩波書店、一九八二年〕

(12) Cf. Paul Ricœur, 《appropriation》, in *Hermeneutics and Human Sciences*, éd. par John V. Thompson, Cambridge University Press, Édition de la Maison des Sciences de l'homme, 1981.

(13) Cf. Harald Weinrich, *Tempus, Besprochene und erzählte Welt*, Stuttgart, W. Kohlhammer Verlag, 1964.〔脇坂豊也ほか訳『時制論――文学テクストの分析』、紀伊国屋書店、一九八二年〕

(14) 『時間と物語』においてリクールは、「フィクション」という語で「民話、叙事詩、悲劇、喜劇、小説」を包括し、これを扱うというが、議論においてじっさいに想定されているのは、端的にいって広義のリアリズム小説であるといってよい。物語性の解体、時間軸の撹乱、語り手の自己解体、メタ・フィクション性などによって特徴づけられる、いわゆるポスト・モダンの文学作品が考慮されることはほとんどない。これは、筋 intrigue のあることが物語 récit であることの必須の条件であるという前提からきている（TRII, chap. IV）。文学理論の立場から見れば、リクールのフィクション論は、あるジャンルや様式に属するフィクション作品にしか妥当しない。

(15) Cf. Russel, *op. cit.*

(16) Cf. Strawson, *op. cit.*

(17) Cf. Searle, *op. cit.*

(18) Nelson Goodman, *Ways of worldmaking*, Indianapolis, Ind.: Hackett Pub. Co, 1978.〔菅野盾樹・中村雅之訳『世界制作の方法』、みすず書房、一九八七年〕.

(19) 大塚、前掲論文、五〇頁。

(20) だからこそ、ある条件のもとでは、ことばと事物の関連づけにまつわる規約に違反して、歴史を非現実のこととして、フィクションを現実のこととして、読む余地が生じてくるともいえる。とりわけ、ジャンルを表示する情報に乏しいテクストを読む場合や、フィクションをフィクションとして、歴史を歴史として認知させるパラダイムが十分に確立されていない読者共同体に属している場合などに、この読みの可能性は高まる。

（はぎわら・こういちろう　大阪大学・大学院文学研究科・博士課程）